



20 時間かかっていたマルチ回収が不要に

和綿農家が語る、ネイチャーマスター®の導入効果

お話を伺った方

兵庫県／和綿農家、初一寝具店経営／高寺 直義さん

農園のご紹介

栽培作物	和綿（品種：河内木綿、名称：YAMATO cotton）
ネイチャーマスター®導入年	2026 年
利用製品	ネイチャーマスター®長期タイプ ¹ 幅 135 mm×長さ 200m
利用作物	和綿、サツマイモ（シルクスイート）
和綿栽培面積	約 500 ㎡



兵庫県西宮市で和綿「YAMATO cotton」を栽培する初一寝具店の高寺直義さん。

和綿栽培では、収穫後のマルチフィルム回収作業に毎年約 20 時間を費やしていました。高寺さんの圃場は元田んぼで、粘土質が強く、マルチフィルムを剥がそうとしても端が土に食い込み、簡単には剥がれません。鍬で土を起こしながらマルチフィルムを剥がし、破れたマルチフィルムを拾い集める作業を繰り返す必要がありました。

「本当に大変な作業でした。体力的な負担も大きかったですし、『またこの作業があるのか』という心理的な負担もありました。」

そんな課題を解決するために導入したのが、生分解性マルチフィルム「ネイチャーマスター®」です。
今回は高寺さんに、導入の背景や実際の使用感についてお話を伺いました。

1. なぜ生分解性マルチフィルムの利用を検討したのか

高寺さんが栽培する和綿は、3月下旬にマルチを展張し、5月上旬に種まき、収穫は9月下旬から10月上旬に行う長期栽培作物です。雑草抑制のためマルチフィルムは欠かせない存在ですが、収穫後には必ず回収作業が発生します。

特に高寺さんの圃場は元田んぼ。そのため土壌は粘土質が強く、マルチフィルムの端に土寄せをすると、収穫後には土と一体化したような状態になります。

マルチフィルムを引っ張っても簡単には剥がれず、鍬で少しずつ起こしていく必要があります。運良くきれいに剥がれれば良いものの、途中で破れてしまうことも少なくありません。破れたフィルムを拾い集めながら作業を進めるため、収穫が終わったあとも数日間はマルチフィルム回収作業に追われていました。

最低4日間、約20時間。

この回収作業の負担が、生分解性マルチフィルムの利用を検討する大きなきっかけになったといいます。



(写真) 元田んぼの圃場は、畝に間に水を流すこともできる

2. 実は一度、生分解性マルチフィルムの利用を諦めていた

実は高寺さんは、今回が初めての生分解性マルチフィルムの利用ではありません。和綿栽培を始めて3年目に1年間だけ別メーカーの生分解性マルチフィルムを利用した経験があります。

過去に利用した製品では、展張後まもなく端から分解が始まったといいます。結果として雑草対策が必要になり、栽培期間中に余計な作業が増えることになりました。

「生分解性マルチは難しいな。」

当時はそう感じたといいます。翌年から、再びポリマルチフィルムの利用へ戻ります。

一方で、収穫後の回収作業の負担は変わりません。だからこそ、「品質の良い生分解性マルチフィルムがあれば使いたい。」という想いは持ち続けていたそうです。

3. なぜ「ネイチャーマスター®」だったのか

転機になったのは、三和農園のYouTube動画でした。

<https://youtu.be/TNqmU83j5VQ?si=FU5PrWkrzerY7VHE>

そこで昭光通商の生分解性マルチフィルム「ネイチャーマスター®」を知ります。

「これはいけるのでは。」

動画を見たときの率直な感想だったそうです。

一方で、過去に失敗した経験があるからこそ、分解速度はどの程度なのかなど、不安はあったそうです。それでも、もう一度生分解性マルチフィルムを使用する価値があると考えられて、2025年末、昭光通商へお問い合わせをいただきました。

高寺さんが導入前にチェックしたポイント

- 栽培期間中は、マルチフィルムが早期分解せず、防草の役割を果たしてくれるのか
- 機械で展張するため、ポリマルチフィルムと同等の強度はあるのか
- 価格はどうか

4. 最大の効果は「回収作業がなくなったこと」

実際に手に取ってみると「厚みや強度はポリマルチフィルムと遜色ありませんでした。」とのことでした。

マルチフィルムはマルチャーで展張していますが、機械展張においても特に大きな問題はなかったそうです。

また、生育期間中の防草効果も「期待していた以上の期間、しっかりとマルチフィルムが残ってくれたので、防草対策になった」と仰っていました。

2026 年は長期タイプ¹を利用。3 月下旬に展張し、10 月上旬の撮影時には展張から 191 日が経過していましたが、和綿栽培に必要な期間を通じてマルチとしての役割を果たしていました。

「通常タイプ¹でも良かったかもしれないと思うほど長持ちしました。」という感想もいただいています。



（左上）展張 20 日目



（左下）展張 111 日目



（右）展張 191 日目

そして高寺さんが最も大きな効果として挙げたのが、収穫後の作業です。

「収穫が終わったら終わりではないんです。」

高寺さんはそう話します。収穫後も数日間はマルチ回収作業が残ります。体力的な負担はもちろんですが、「またあの作業をしなければならない」という心理的な負担も大きかったといいます。

「ネイチャーマスター®を使って、これまで毎年約 20 時間かかっていた回収作業がなくなりました。

負担は劇的に軽減され、休めるようになったことが大きいです。」

体力的な負担だけではなく、心理的な負担も本当に減ったと思います。」という言葉が印象的でした。

5. 和綿栽培を通じて、日本の綿文化を未来へ

高寺さんは兵庫県西宮市で創業 70 年以上続く寝具店「初一寝具店」を営んでいます。かつて西宮市には数多くの布団店があったそうです。しかし現在、綿布団を手掛ける店舗はわずかだといいます。

「綿布団そのものを利用したことがない世代も増えてきたように感じます。」

そうした状況だからこそ、高寺さんは和綿栽培を通じて綿文化を伝えていきたいと考えています。



(左) 高寺さん。経営する初一寝具店の前にて (右) 店内には、和綿を触ることができる展示品がいくつもある

高寺さんと和綿との出会いは、大阪府 石切鋤谷神社の参道にある「河内木綿はたおり工房」での糸紡ぎ体験でした。もともと農業にも興味があり、自ら畑で作物を育てていた高寺さん。糸紡ぎ体験で譲り受けた綿花の種を「試しに植えてみよう」と思ったことが、現在の和綿栽培の始まりでした。

高寺さんによると、和綿は洋綿と比べて繊維が短く、独特のハリと弾力があります。布団にすると同じ量の綿でもふっくらとした高さが出るのが特徴です。

「和綿は、なんともいえない、独特の手触りに魅力があります。」

綿布団は、打ち直しや生地の変換を行うことで、長く使い続けることができます。親から子へ、子から孫へと受け継がれていく文化も綿布団の魅力のひとつです。

現在収穫できる綿の量では、布団に換算すると年間 4～5 枚程度の製作にしか利用ができません。決して効率の良い取り組みではありません。それでも続ける理由がある。

たくさんの綿を利用する綿布団を使う方が増えることで、和綿農家が増え、農家の経営が安定し、また綿打ち職人や布団職人の雇用が安定し、技術の伝承が可能となります。

高寺さんは、「綿打ちの技術が残り、日本で和綿を栽培する農家が増え、綿文化が次の世代へ受け継がれる。そんな良い循環が生まれてほしい。」と話していました。

6. どんな農家さんにおすすめしたいか

最後に、生分解性マルチフィルムをどのような農家さんに勧めたいかを伺いました。

高寺さんの答えは、「今マルチフィルムを使っている、すべての生産者さん。」でした。

その理由について、「ポリマルチフィルムと遜色のない防草効果があります。栽培後の後片付けや毎年発生する大量の廃棄物を考えると、作業軽減は間違いないと思います。」と話されます。

さらに、「軽減された時間を作付面積の拡大や別の作業に活用できます。」とも語っていただきました。

高寺さんが感じたネイチャーマスター®のメリット

- マルチ回収作業の負担が大幅に軽減された
- 元田んぼの圃場でも後片付けが不要になった
- ポリマルチフィルムと遜色のない使用感だった
- 和綿栽培でも長期間マルチとして機能した
- 廃棄物削減につながった
- 心理的な負担が大きく軽減された



展張 41 日目



展張 145 日目



展張 78 日目



（左上）2025 年に収穫をしたタネ

（左下）はじけた綿

（右）展張から 191 日経過した圃場の様子

¹ ネイチャーマスター®には、通常タイプと長期タイプがあります。栽培作物や、栽培地域によって、推奨するタイプが異なります。

■ 初一寝具店のご紹介

昭和 28 年創業の老舗寝具店です。真心こめた職人の手作りで紡がれる伝統の最高品質の綿布団を製造・販売されています。

住所

兵庫県西宮市馬場町 5-12

営業時間

11:30～18:00（日曜・月曜・祝祭日除く）

URL

<https://hatsuichi-futon.com/>

■ 昭光通商とは

会 社 名 昭光通商株式会社

住 所 東京都港区芝浦三丁目 1 番 1 号 田町ステーションタワーN 31 階

代 表 者 名 代表取締役社長 渡邊 健太郎

設 立 1947 年 5 月

事 業 内 容 化学品、合成樹脂、金属・セラミックスなどの素材を取り扱う商社として、多様なサプライヤーと顧客をつなぎ、調達から物流、加工、製品化までを一貫して支援するソリューションを提供しています。

海 外 拠 点 タイ、韓国、台湾、中国

U R L <https://www.shoko.co.jp/>

■ 本リリースに関する問い合わせ先

昭光通商株式会社

URL <https://www.shoko.co.jp/contact/>